

オプション教材ゲンゲ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

2.

3.

4.

5.

なぜ、通常、私たちは、「私が『私』といふとき、それは厳密に私に帰属するやうな『私』で」あると考えるのか、また「私から発せられた言葉のすべてが私の内面に還流する」（三島由紀夫『太陽と鉄』）と信じているのか。その理由は、私たちが、「自己のなかに必ず跡づけられている他者との関係の動き」を、そうと気づくまでもなくすぐに縮小し、還元してしまふからである。つまり、もう少し具体的に言えば、小林秀雄も繰り返し指摘しているように、「精神が考へたところを言葉が表現するのだといふ迷妄」をどうしても逃れられないからである。

何故人々がこの平凡な事実を忘れるかといふと、日常生活に於いても、人々は精神の考へたところを言葉が表現するのだといふ迷妄を如何にしても忘れられないからである。処が事実、人は考へるのは自分の精神なのか自分の言葉なのか知る由もないのである。考へるといふ事と書くといふ事は二つの事実を指してはゐないのだ。言葉といふ技術を飛びこして何かを考へるとは狂気の沙汰である。（小林秀雄「アシルと亀の子」）

私たちはランボーの小説を読むとき、フロベールの小説を読むとき、そこにたしかに作品があるという気がする。そこに独特の音色を聴き取り、生き生きとした筆致で描かれた輪郭とか色彩を見わけける。かけがえのないトーンや声調を見出し、なにかしら新鮮な意味合いが独自の個性として刻印されているのを感じ得る。だからそういう作品（創作され、おくられた言葉）を生み出し、おくれた作者がいるということも確実で、疑いようがないと思える。しかしそうした独自性や個性的特性は、私たちがふつうそう考へているように、その個人（作者）に本来そなわっているような固有な同一性なのであろうか。自己のうちで必ず自己とは異なる他者との関係の動きを、他者へとおくり返す転送の運動の痕跡を縮小し、還元して、それ自体として充滿し、自らに現前しているやうな独自性や個性なのであろうか。もし作者（個人）がそれらの言葉の構築（作品）を創造し、おく

つた絶対的な起源である——言葉を生み出し、おくる行為や運動の外側に抜け出し、上からそれを宰領し、統轄する超越した創造主体である、いわばその「作品」に対して「神」のごとき存在である、と絶対的に決定できるならば、そうみなすことに根拠があるかもしれない。しかし作者は自分の言葉を創出し、おくる行為や運動を開始する真の始源である——その行為や運動を上から統轄する完璧な創造主体である、と絶対的に決定することはできないだろう。なぜなら作者は、既に、そしてつねに、おくられている言葉の運動を通して、その運動のなかで、その運動としておくるからだ。まったく恣意的に定まった必然として動いている形相性（と一体化した意味内容）の相互的諸関係の体系的作動のなかにいつも既に巻き込まれながら、つねにおくられつつ、おくる運動によつて、つまりつねに他なるものとの諸関係の動きを通じて、そういう動きとしておくるからである。語るということ、書くということとは、その実情に最も則して言うこととすれば、そういう他なるものとの諸関係の動きに参入するということではないだろうか。そうするとどのような個人であれ、作者であれ、言葉を創出し、おくるのではなく、中継しながら組み換えたり、ずらせたりしているのだと言ったほうが事実に近いのではあるまいか。



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

外国語には二者択一とか総てか無かというような思考法がある。
 二者択一は対立するものがあるとき、そのどちらかひとつを選択することだが、それは同時に他が否定されることを意味する。両者のよいところを採る折衷主義もないわけではないが、両者を共存させる考えはめずらしい。これはキリスト教という一神教の影響であるという説もあるが、絶対的対立が強調されている。総てか無かも一種の二者択一であるということが出来る。

わが国では本来ならば併存できないはずのものが何ら矛盾も感じられないで共存している。一般の家庭で神棚と仏壇と同じ部屋にあって、朝夕それぞれの様式によって「拝む」ことをきわめて自然であると思っている。仏教を信仰すれば神は否定しなくてはならないという一元論ではなく、仏も神も認める。多元論、複元論である。
 一元論から見ると多元論が得体の知れないものに見えるのはやむを得ないことかもしれない。日本語は多元論的文化の中で発達してきたものであるから一元論の一貫性、対立の原理をはっきりさせない。
 「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」主義である。一元論からすれば矛盾だということになる。

しかし、多元論のメリットも忘れてはならないであろう。一元論は明晰ではあるけれども同一平面の上における問題しか処理することができないのは、矛盾する次元のものをすべて棄ててしまっているからである。それに対して、多元論では立体的な論理を追求することができる。一元論の論理では芸術とか生命現象をとらえにくい、多元論は感情の比較的高まかいヒダにまで入って行くことができる。

一元論の論理が平面幾何学的であるとすれば、多元論の論理は生物学的であるといえよう。

多元論においては首尾一貫ということはむしろ退屈な単調さと感じられやすい。ドライブ・ウェイが一直線に伸びているとすれば運転者はかえって運転を誤りやすいといわれる。適当な曲線の変化があった方がよい。論理においてもまったく純粋なロジックはどう

も人間らしさの乏しい冷たいものを感じさせがちである。悲劇はあくまで深刻でなくてはならない。いやしくも観客が笑いこけるような場面があつてはよろしくないとするのが純粋な貴ぶ一元論である。ところが、シエクスピアのような天才は滑稽な場面を挿入することによって、かえっていつそう悲劇感を高めるコツを知っていた。しるこをうまくするには砂糖だけでなく、ひとつまみの塩を入れるのと同じ異曲である。どうもわれわれの感覚には純粋な論理だけでは満足しないところがある。それを考慮に入れているのが多元論的な論理というわけである。

一見矛盾するものを調和させる多元論にとって、不可欠の方法は「とり合わせ」である。同類のものや筋のおつたものを集めるのではない——それでは月並みで退屈になる——互いに範疇を異にするものを結び合わせて意外のおもしろさを出す。それが「とり合わせ」である。ぼたんに唐獅子、竹に虎、などはそのとり合わせの感覚によって生れた絵画的世界の例である。不調和を越えた調和を支える論理に着目したものである。日本語はこういう柔軟な論理を表現するのに適しているし、逆に言えば日本語の論理はそういうところのない性格のものにならざるを得ない。

(外山滋比古の文章による)



近代小説は一般に無制約な形式であるといわれている。無制約であるとは、限界まで希薄化された様式性を意味する。私に帰属する固有の内面を、そのまま忠実に模写し外部に対象化するには、表現媒体はできるだけ無制約であることが望ましい。近代以前の日本語文には、様々な制約が課せられていた。明治期における「言文一致」とは、たんに口語と文語の一致を目指したものではない。国木田独歩の『武蔵野』以降の日本の近代小説であろうと、会話部分が忠実に「口語」を再現しているといえない点をあげるまでもなく、それは歴然とした事実だろう。今日でも事態は同様である。「対談」や「座談会」でも、会話のテープを忠実に起こした原稿と、公表される文章とのあいだには大きな相違がある。「対談」や「座談会」として公表される文章のほとんどは、日本の近代小説の会話体を規範として修正されているのだ。たんにテープを起こしたにすぎない文章は、読者の立場からいえばほとんど読むに耐えない。

明治における「言文一致」とは、文語と口語の一致を目指すことを必ずしも意味していない。それは軍艦や軍隊を製造したり運営したりする主体（近代的な私）の内面をそれ自体として過不足なく外面化するための、可能な限り無制約的で無媒介的な、換言すれば様式性に制約されない透明な表現形態を無から創造するために求められた運動にほかならない。「言文一致」によって生誕した日本の近代小説のスタイルは、主語一人称代名詞を「自分」に、文章末尾を「デアリマス」に統一するよう決定された軍隊用語のそれとほとんど構造的に照応している。

明治期において新文章をめぐる試行錯誤が、もつぱら近代小説の文体をめぐる問題として顕在化したことには必然的な理由がある。小説形式は他の伝統的な文芸ジャンルと比較して無制約的な、没様式的なジャンルである。だから小説は近代的な内面を外面に過不足なく移しかえる透明な表現形態として、近代における文学表現の王座の地位を確保しえた。

しかし以上のような発生メカニズムの解明は、近代小説の自己

了解を裏切らざるをえない。近代的な私は、固有の内面を小説形式という無制約的で透明な表現形態において、作品に対象化し外面化する。だが、「言文一致」が文字どおりの言文一致を意味していないように、無制約的で没様式的であると信じられた近代小説の言語には、暗黙の制約性や様式性が課せられているのだ。それは主体を規制するというよりも、主体なるものを事後的に産出するような超越的なメカニズムにほかならない。近代小説の作者および読者は、この超越的なメカニズムを制度であるとは認識しない。むしろ原理的に認識しないというべきだろう。

近代小説の言語と文体は近代以前に普遍的だった「作者のいない作品」の水準を超えて、作者Ⅱ作品（内面Ⅱ外面）という直結形態を可能ならしめたと自負している。けれども認識されない表現形態の物質性は、無意識的な制約として近代小説の作者および読者を密かに統御し支配している。それは文体についてのみいえることではない。近代小説の発生史を克明に検証してみれば、近代的な意識には大気のように自明であると信じられているものが、長年の曲折の結果としてかうじて確立されたシステムにすぎないことも了解されるだろう。

（笠井潔氏の『探偵小説論序説』による）



「くるまざ」という言葉は、室町時代のころにはすでに日本語の中に定着していたらしい。一六〇三年（慶長八）に日本イエズス会が長崎で刊行した有名な『日葡辞書』にはCurumazaninauruという語が採られていて、例文としてCurumazaninauru（車座に直る）があり、「皆の人々が円形に座につく」という説明がついている。

何の具体的な根拠もないことだが、私はこの「車座」という語が、いずれにしても乱世の時代になってから人々に愛用されるようになったのではないかと想像している。「車座に直る」のは女たちではあるまい。合戦を前にした武士団、自分たちの権益を犯されそうになって対策を練るためひそかに集まった豪商たち、権力者に無理難題をふっかけられて鳩首協議するために集合した村の代表者たち、そういう男どもの緊張した顔が、この言葉の背後から立ちのぼってくるように思えてならない。

しかしこの形のつどいは、いったん緊急事態が解決されれば、たちまち一転して、酒宴と歌舞放吟の場になるだろう。女たちもその時は車座に花を添え、その主人公にさえるだろう。やがて天下太平の世ともなれば、もっぱら後者の車座が全盛となる。

いずれにしても、全員が内側を向くという形の座のとり方は、集団の心構えを統一し、同心の者としての結束と忠誠を誓い合い、敵対する者たちに対する排他的情熱を高める上では、最も効果的な陣形だった。高校野球でもバレーボールでも、危機に臨んだ監督たちは皆これを応用する。何しろ車座に座るといのは、互いに顔と顔を向け合い、相手の一挙手一投足まで直接見つめていられる唯一の座り方なのである。祝いの席であるなら、一同心を同じくする快い興奮、盃を交わし合う歓びに、おのずと歌も踊りも出てくるのは当然だった。

（中略）

私は財政とか経済とかの方面についてまったく暗い人間なので、まことに単純なことしか言えないが、アメリカと日本の間で極度に

緊張が高まっている貿易摩擦や経済摩擦の根源には、単なる経済問題よりもずっと深い生活原理の食い違いが横たわっていることは明らかで、これを打開するにはたぶん何世代もかかるのではないかと、さもないければ再び重大な衝突が激発することもありうるのではないかと、という危惧さえ感じることがある。

この摩擦は、「開放社会」と「車座社会」との対立、というふうにも単純化して言えるだろうが、アメリカの（そしてヨーロッパの、アジアの、その他全世界の）土地や不動産や美術品その他を次から次へと買い漁り、値を釣りあげておきながら、自国の土地や不動産その他に関しては、高い障壁を張りめぐらしてヨソ者の参入を可能な限り阻止する姿勢を貫こうとする日本人というものは、自由貿易、開放主義の原理を奉ずる人々から見れば、理解できないばかりか、異様な魂胆を内に秘めて世界征服の野望さえちらつかせて前進する邪悪な民族とも見えかねないだろう。アメリカ政府や議会の中にそういう感情が高まってくる時には、各地の市民の中にその何倍もの強さにおいて、同種の感情をたかぶらせている人々がいると見なければならぬ。

（大岡信『詩をよむ鍵』による。ただし一部原文を改めた）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

社会において最も重要なのは、複数の人間を拘束する決め事をつくり出すことである。それにはいろいろなやり方がある。アメリカ人なら、その状況にあてはめるべき客観的ルールをそれぞれ主張して、どちらが正しいかを争うだろう。アメリカに限らず、近代西欧社会はルールに基づいて権利を主張する方法をとる。また中国人なら、最初に互いの利害を徹底的に主張したうえで妥協点を探すだろう。

日本のやり方はそのどちらでもない。日本では決め事は、対立する利害を相互に自発的にゆずり合い、段階的に妥協点を発見していく形でつくり出される。「あなたの気持ちはわかる、だから私の気持ちもわかってくれ」「ここはゆずるからあそこはゆずってくれ、お互いに痛みはわかち合おう」。対立する立場にある二人が一步一步近づき、最終的な妥協に至る。日常の会話で、会社の会議で、そして政治の場面で、人々はこうしたゲームをくり広げてきた。

西欧や中国のやり方と比較した場合、この方法は関係者の自発性をそこなわず、すみやかに意思統一できる点でたしかにすぐれている。だが同時に、ひとつ大きな構造的弱点をもちかかえている。こちらがゆずったのに相手がゆずらなければ、ゆずったほうの丸損である。それでは妥協しようという気にはならない。こちらが譲歩すれば相手も譲歩するという保証があつて、初めてこの決め事プロセスは一般的に成立しうるのである。

実際、日本人と中国人が交渉する場面ではこうした齟齬が起きやすい。日本人のほうは相手の譲歩を期待してまず譲歩する。ところが、中国人の側から見れば、それは日本人側の立場の弱さを示す。だから、自分の利害をいっそう強く主張する。ところが、それは日本人にとつては、相手の好意につけこむという最も許しがたい振る舞いなのだ。そこで当然交渉はご破算になる。けれども、じつは話はこので終わらない。中国人にとつては、最初はずつておきながら突然強く出るのは、それこそ騙し討ちなのだ。

こんな場面にぶつかったとき、日本人はこう叫ぶだろう。――「なんで人の気持ちがわからないんだ!」。まさにそのとおりで、じつは「気持ちのわかりあい」というのは、日本社会の社会的決め

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

事をめぐるコミュニケーションにおいて、相互の譲歩を保証する「装置」なのである。相手の気持ちを察し、それを迎え入れるような形へこちらの気持ちも動く。相手の感情をこちらの感情のなかに取り込む。この種の感情の伝染性を日本人は大量にもっており、それによつて相互の譲歩が保証されている。

つまり「気持ちのわかりあい」は日本固有の社会的な決め方、社会的コミュニケーションの様式と密接に結びついているのだ。そうした点で、日本は「間人主義の社会」だといわれる。「間人主義」というのは西欧の「個人主義」に対応する概念で、(一)相互依存主義――社会生活では親身な相互扶助が不可欠であり、依存し合うのが人間本来の姿である。(二)相互信頼主義――相互依存関係の上では、自己の行動に対し相手も自己の意図を察してうまく応じてくれるはずだという相互信頼が必要である。(三)対人関係の本質視――いったん成立した関係はそれ自体価値あるもので、その持続が無条件に望まれる、といった人間関係の特徴をさす。

(佐藤俊樹『〇〇年代の格差ゲーム』より)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

天文学者が宇宙の彼方^{かなた}を観測しているときに、宇宙のそこで生じている出来事に、脳は何ら関係していない。しかし、その出来事を天文学者が観測しなければ、つまりそこで天文学者の脳が関与^{かんよ}しなければ、そんな出来事はヒトにとつて、存在しないも同然と言つてよいだろう。宇宙論では、ある物理定数を測定と計算の結果確定すると、そうして定数を決定した宇宙と、決定する以前の宇宙とは、異なつたものになるという考えすらある。むろん、定数を決定するのはヒトの脳である。

ヒトが人である所以は、シンボル活動にある。言語、芸術、科学、宗教、等々。これらはすべて、脳の機能である。われわれはお金を使い、衣服や帽子^{ぼうし}、アクセサリー^ごを身につけ、車にお守りを吊^{つる}し、ゴルフ道具を担^かぎ、碁やマージャンで暇^{ひま}を潰^{つぶ}す。これらはすべて「具体化したシンボル」であるが、これもまた、すべて脳のシンボル機能に発する。

われわれの社会では言語が交換^{こうかん}され、物財、つまり物やお金が交換される。それが可能であるのは脳の機能による。脳の視覚系は、光すなわちある波長^{はんい}範囲の電磁波^{でんじは}を捕^{とら}え、それを信号化して送る。聴覚系は、音波すなわち空気の振動^{しんどう}を捕^{とら}え、それを信号化して送る。始めは電磁波と音波という、およそ無関係なものが、脳内の信号系ではなぜか等価交換^{こうかん}され、言語が生じる。つまり、われわれは言語を聞くことも、読むことも同じようにできるのである。脳がそうした性質を持つことから、われわれがなぜお金を使うことができるかが、なんとなく理解できる。お金は脳の信号によく似たものだからである。お金を媒介^{ばいかい}にして、本来はまったく無関係なもの同士の交換^{こうかん}が生じる。それが不思議でないのは（じつはきわめて不思議だが）、何よりもまず、脳の中にお金の流通に類似した、つまりそれと相似な過程がもともと存在するからであらう。自分の内部にあるものが外に出て、それは仕方がないというものである。

ヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的^{ぜんぱん}に眺めようとする立場を唯脳論^{ゆいのろん}と呼ぼう。ヒトが人である所以は、大脳皮質が発達するからである。後に述べるように、そこからヒトのシンボル機能が発生する。ヒトの脳と動物の脳が異なることは、誰でも知っている。ゴリラの脳とヒトの脳を机の上に複数個並

べて見れば、素人でもただちに両者を識別するであろう。しかし、それはそれだけのことだとも言えるのである。つまり、ヒトの脳もゴリラの脳も、見ようによつてはさして違^{ちが}わない。唯脳論^{ゆいのろん}は、ヒトとゴリラの類似と差異とを説明しようとする。

それだけではない。唯脳論^{ゆいのろん}は、ヒトの中にある差異を説明しようとする。ヒトは考え方の違^{ちが}いをめぐつて大喧嘩^{げんか}をする。それが利害関係であるなら、まだ救いようがある。利害を調整すればいい。しかし、基本的な考え方の違^{ちが}いというのも、よくあることである。これは利害がかかわらないだけに、逆に調整が困難である。いわゆる「神学論争」というやつだが、その調整は唯脳論^{ゆいのろん}に頼^{たよ}るしかあるまい。

（養老孟司^{たけし}『唯脳論^{ゆいのろん}』による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

近代文明は、構造の発想に加えて効率と合理性を重んじる機能の発想を社会運営の中枢原理として取り込み、環境制御による成果志向的な社会運営法を確立した。近代は構造よりも機能を優先すること、中世文明の脱構築をはたしたのである。より正確に表現すれば、機能の発想が構造の発想を包摂するかたちで、文明のメタモルフォーゼ（変態）が起きたことだ。成果を上げるために人や物を制御する。目的を達成するために、効率的な手段を講じる。このような発想転換をした末に生まれたのが近代文明だった。機能の発想は、成果を確保するために構造（ルール）は次つぎと変更してよい、構造を維持することよりも環境変化に適応することのほうが重要である、とする価値を生む。実際、近代社会では法や規範などの規則は絶えず変化しており、変化することが近代の本質であるといえる程、変化が奨励されてきた。

機能的な成果主義は、規則にしたがうだけであつたり、それに拘泥するだけでは、競争に取り残され敗者の憂き目を見る、という倫理基準をもたらす。成果を上げて進歩、発展することが評価基準となる。このため自己を取り巻く環境への一般的適応能力を高めること、成果を高めるための技能や知識を習得することが至上価値とみなされる。また、成果を確保するために、目標に対する手段を緻密に考量し、細心の注意を払って事のなりゆきを見守り、絶えずアクションを修正することが求められる。さらに、人びとに対して強圧的になると、志気が低下して成果の確保が困難になるので、志気を損なわぬよう各人を管理する必要がある。こうして、機能の文明は支配に代わって管理の発想をもたらした。機能の文明とは管理が優先する文明のことである。

これに対し、来たるべきポストモダンを特徴づけるのが意味の文明である。その特徴は、機能の発想を超え、いまだ構造化していない領域での営みを重視することにある。そこは制御による成果の確保が中心となるのではなく、また規則によるパターン維持が中心になるでもない。差異の分節による意味創発が既存の伝統を揺るがし、文化としての意味の追求が中心となる領域である。

（中略）

意味の文明の兆候は、物質的欠乏から解放されて、人びとの主たる関心が所有から存在へ、物質から記号へ、欠乏から差異へと移行するなかにあらわれている。差異としての記号がもてはやされ、商品を物Ⅱ差異Ⅱ記号Ⅱ意味の方程式によって脱物質化する消費社会の風潮は、現段階では差異の戯れとしての意味志向にとどまるとはいえ、効率性と合理性が支配する経済の攪乱要因となつている。また現在、生産様式とそこでの人間関係が優位する機能の文明に対し、消費における意味作用がゆらぎを引き起こすようになっていく。生産が優位した社会から消費社会への移行は、機能優先の発想に風穴をあけることになるだろう。

（今田高俊『意味の文明学序説』より）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

英語にキャンノンCanonという単語がある。もとはギリシャ語で、尺度、基準の意味だった。それがキリスト教の正統的戒律、聖書の正典の意味になり、さらに文学・文化の標準ないし標準的作品を意味する言葉となっている。

アメリカでは近ごろ、このキャンノンの見直しが話題になっている。社会現象としてはこれまで正義とされてきたものが不正とされ、野蛮とされていたものが逆に崇高と見なされるたぐいのことが多い。西部劇映画における騎兵隊と先住民（インディアン）の描き方など、その典型的な例となるだろう。そういう傾向を反映して、歴史の書き換えの要求は広範になされているらしい。文学でも同様である。古典とされていた作品がわきに押しやられ、従来無視されていた作品がキャンノンの座に押し上げられる。そういう文学史の本や教科書が相次いで現われ、大学などにおける文学・文化教育にも大幅な変革を迫っている。

これに呼応して、日本におけるアメリカ研究も根本的に変わらなければならぬ、という声が学会などでよく聞かれるようになった。だがまた、そんなに急に変わるものか、といった不安の声もよく耳にする。

キャンノンの見直しは、本当は別に新しいことではない。かりに日本文学で『万葉集』や芭蕉は不動の地位を占めてきたとしても、『古今集』や『新古今集』、西鶴や蕪村の地位は、しばしば揺らいできたのではなからうか。一世を風靡した紅露逍鳴のうち、いまも衆目の認める「文豪」は森鷗外のみで、他は特別の愛好家以外にはなかなか読もうとしない。そしてこの四人の陰にかくれていた夏目漱石が、いまでは日本近代文学を代表する地位を占めているように思われる。

アメリカでも同様である。十九世紀に最高の詩人と仰がれていたロングフェローは、二十世紀に入ると神聖な座から引きずり降ろされてしまった。彼を含めて、文学界に君臨した「ケンブリッジ・ブラーミン」いまいずこだ。そして、粗野で猥雑とされていたホイットマンが、アメリカの代表的詩人と見なされるようになった。アメ

リカで最初のノーベル文学賞受賞作家シンクレア・ルイスをはじめ、いまでは研究者にも読まれなくなってしまう文学者も数多い。だが最近のアメリカでのキャンノンの見直しは、個々の人物や事件の長い時間をかけた見直しとは違う。それはアメリカの社会や文化の全体的見直しと結びついているのだ。一九六〇年代からのアメリカの激変、つまり公民権運動、さまざまな少数派人種の台頭、あるいはフェミニズムの進展などがあり、かつての白人男性中心の文化は打倒の目標とされ、多文化主義が唱えられるようになった。ポストモダンニズムなど、伝統的価値の権威を否定する批評理論も、この動きを助けているといつてよい。

（中略）

このように見てくると、キャンノン見直し運動は、現代のアメリカにおける価値観の動揺と文化の正統性をめぐる戦いであることが分かる。私たちがそれを理解し、その見直しの方向に注意を払う必要は、間違いないところある。それを日本に適用して役立てられる部分も多いように思う。

（亀井俊介『わがアメリカ文学誌』より）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本人は、一般的には、神社仏閣、能や茶道など、古きよき日本の伝統が好きで、それを誇りに思っているのだが、その一方で、実生活を見ると伝統破壊者とも言える側面をもっている。

まず、屈指の横文字カタカナ氾濫社会であることを見、若者の言葉を聞けば、国語における伝統の軽視は一目瞭然である。古典としての言語の純粋性に対する感度が、フランスなどに比べてきわめて低い。実際、現在の日本語は横文字カタカナを抜きには成り立たなくなっている。年々大袈裟になるクリスマススのイルミネーションが終わると、正月には、依然として大勢の人が神社仏閣に初詣に行く。クリスマスまではまだよいとして、最近では、ハロウィーンも定着しつつあるようだ。

その一方で、立春から大寒までの二十四節氣にそった日本の伝統的季節行事は、テレビのニュースの枕詞である。

また、食べ物に強いこだわりをもつ日本人は、旬にこだわるが、いまは養殖、輸入、ハウス栽培などで、ほとんど一年中手に入る。イチゴやスイカも一年中あるといつてよい。二十四時間営業のコンビニが繁茂するように、消費者が望むことなら、利便性の向上のためならなんでもやる。アメリカに勝るとも劣らない商業マインドである。こうした高度消費者中心資本主義が、日本の一面としてすでに社会に根を下ろしている。

さらに最近では、シュンとなると日本のものではなく、ボジョレー・ヌーボーに始まり、イタリア産ポルチーニやトリュフなどといった外国産のものでシュンを感じて楽しむといった本末転倒なことを国民挙げて行なっている。

コメは日本人にとってただの主食ではない。依然として文化的、象徴的意味合いをもっている。だからこそ、コメの輸入を解禁しないのであり、国民もコメの自由化を要求しないのである。そのコメは「洗う」ものではなく「とぐ」ものである。にもかかわらず無洗米とってのけて何も感じない。こういうところにも日本における伝統のあり方があらわれているだろう。

もつと面白いのは正月である。新年を新暦で祝うのは、アジア諸

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

国ではおそらく日本だけではないだろうか。伝統を重んじるのであれば、やはり旧暦で祝うべきであろう。実際、権威を尊ぶ中国人は、依然として旧暦で正月を盛大に祝っている。新暦の正月など見向きもしない。韓国も同様に旧暦で正月を祝う。

このように日本人は、古きよき伝統を重んじるという一方で、日々の行動は伝統など構いなしである。名を捨てて実をとるとも、軽薄とも、柔軟とも、いい加減とも、節操がないともいえるのが、日本人の行動なのである。つまり、融通無碍でつかみどころがないのである。

欧米社会は理念を優先するが、日本社会は現状を是認し生活を優先する。極端にいえば、「うそも方便」の社会である。別の見方をすれば、欧米では、概念化・抽象化・階層化を通して、矛盾を統合的に視点から上位レベルで解消して、首尾一貫性を確保するように努めている。しかし、日本では、矛盾は矛盾で併存させるか、生理的に切り捨てるか、あるいは無化してしまう。

西欧的に考えれば、日本人の行爲を見ていると分裂しないのが不思議であろうが、当の日本人は何も矛盾を感じていない。つまり、気にしていないのである。しかし、行為者としての日本人の心性には、なんらかの一貫性（合理性）が存在するはずである。それが西欧的な観点や現在の日本人論の枠からは見えないのである。

（小笠原泰『なんとなく、日本人』による）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

あるところに、一本の木が生えていた。木は、一人の少年をかわいがっていた。少年は毎日、木のところにきて、遊ぶ。枝でぶらんこをしたり、りんごの実をもいで食べたり、木陰でまどろんだり……。彼は木が大好きで、木も幸せだった。

だが、時がたち、成長した彼の足はしだいに遠のく。木はひとりになることが多くなった。ある日、彼が来た。木は喜ぶ。彼は、遊ぶための金が多いと言ふ。木は、りんごの実を売って金をつくったらしい、と勧めた。彼はりんごの実をこっそり採って、去る。木は、幸せだった。

やがて、壮年になって、再び彼が来る。家がほしい、結婚したい、と言ふ。木は、枝で家建てたらどうだろうと勧める。

そこで、彼は枝を切り落とし、全部、持って行ってしまう。木は、幸せだった。

また、木がひとりぼっちで過ごす日々が続いた。ある日、年をとった彼がやってくる。どこか遠くへ行きたい、船がほしいと言ふ。それなら私の幹を切り倒して船をつくったらいい、と木が言う。彼は木を切り倒して、持って行ってしまう。木は、幸せだった。

長い年月がたった。老人になった彼が、とぼとぼ戻ってきた。しかし、木には、何もしてやれることがない。私はもう切り株だけだ、せめて、ここに腰をかけてお休み、と言ふ。背中の曲がった老人は、ゆっくりと腰をおろす。そして、木は幸せだった……。

こういう話である。

その含意は、実に深く、豊かなものである。この絵本自体がすばらしいが、さらに私の関心をひいたのが、この本を題材にしたある研究なのだ。

この絵本を子どもたちはどう読むだろう、と考えた心理学者の守屋慶子さんが、四カ国の子ども約二千人に本を読ませ、感想を書かせて、それらを分析した。その成果が『子どもとファンタジー』（新曜社）という本にまとめられている。

（中略）

詳しくは原著に譲るとして、私は自分が興味をひかれたことの一つ二つを紹介したい。

たとえば、木と少年との接触があるたびに「木は幸せだった」と書かれている。この表現を、各国の子どもたちはどう読み取っているのだろうか。

四カ国というのは、日本、韓国、スウェーデン、イギリスである。感想を書かせてみたら、韓国、スウェーデン、イギリス、の子どもたちは、総じて「木は幸せだった」という表現をこぼ通りに受け取っていることがわかったそう。つまり、木は幸せだったと言っているのだから、幸せだったのだ、と顔面通りに受けとめている。

それにひきかえ、日本の子どもたちの受けとめ方は、やや複雑である。「木は幸せだった」とあるけれども、本当にそうなのだろうか、と思うらしい。本当はいやだったのだ、本当は悲しかったに違いない、というふうな受けとめる子どもが多いことがわかった。隠された部分があるように推量する、というのである。

（中略）

守屋さんは「二重構造」ということばを使っている。たとえば「二重構造型の推量は、日本の子どもたちには多いが、英国やスウェーデン、韓国の子どもたちにはみられない」と書いている。

（白井健策「天声人語」の七年）による



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

チップを渡す^{わた}ということが、私たちの国にはない。チップはすべて、正価^{ふく}に含まれているものと思っている。高級レストランの高級さは、サービスの高級さとイコールであると無意識に思っている。ホテルやレストランで気持ちのいい応対をされた場合、心付けを包むのではなく、「またこよう」と私たちは考える。それが私たちの評価なのである。

最近の温泉宿では、部屋に備え付けのパンフレットに「サービス料があるので心付けは不要」と、わざわざ書いてあったりする。年輩^{ねんばい}の知人は、彼女の長年の習慣らしく、温泉宿には必ず心付けを用意していくが、いつもそれは和紙に包んである。現金を生で渡す^{わた}、ということに、私たちは激しい抵抗^{ていこう}を感じる。しかも、紙幣^{しへい}ならともかく、コインを渡す^{わた}という習慣は、まったくない。

そして商売^{しょうばい}というのは、正直さを欠いたら成立しないと、これもまた、私は自分の国の習慣で信じている。千円のことを二千円で売ったとしたら、その瞬間^{しゅんかん}は千円儲^{もう}かったですむが、しかし、だまされた^{だま}と知った客は二度とこないだろうし、その客がほかのだれかにそのことを話せば、ほかの客までこなくなる、というふうな思考回路を私は持っている。長い目で見たら、正直な商売^{しょうばい}のほうがぜったいに得だと思っている。だから、その場限りの百円、二百円を儲けようとする気持ち^{もち}が、まるでわからないのである。その「わからない」ことこそ習慣^{ちが}の違い、郷の内部の問題のはずなのに、ことお金に関しては、ほかのことのようにすんなりと従うことができない。

反対に考えると、異国の人が日本を旅した場合、お金に関する習慣^{ちが}の違いには、さほど苦勞^{くろう}しないのではないかと想像する。ぼったくりバーなどにいけば話はべつだが、ごくふつうに移動して、ごくふつうに食事をしているぶんには、ぼられることはまずないし、チップの心配もいらないし、お釣^{おつり}りをごまかされることもない。そのぶん、物価が高いという多大な難点はあるわけだが。

では、異国の人が日本にきた場合、いちばん苦勞^{くろう}する習慣の違いはなんだろう、といえ、沈黙^{ちんもく}であるように私は思う。三週間や一カ月、異国を旅して帰ってきたとき、私^{わたし}がもつとも違和感^{いわけん}を覚えるのが、じつはその沈黙^{ちんもく}である。日本の人は驚くほど声を発さない。

ぶつかっても声をたてず、出くわし状態になっても無言、人の足を踏^ふんでしまっても「すみません」と言う人はとても少なく、せいぜい無言^{えしやく}で会釈^{えしやく}するくらい。

たとえば、銀行でも空港でもいい、人々が列になつて順番を待っていたとする。そこに、列の存在に気づかず、だれか入りこんでしまったとき、ほとんどの国では声を出して注意する。「こつちに並んで！」と、ひとり言うこともあり、列にいる全員が口々に言うこともある。が、日本では、声に出さず空気です。ついさっき、じつはそのような光景をJRの駅の構内で目の当たりにしたのだが、列の人々はみな、無言の内に、対応をしている駅員に、訴^{うた}えかけるような視線を投^なげていた。駅員はちゃんと気づき、カウンターに割り込^こんできた女性に、「すみませんが、列ができていますのであちらに並んでください」と注意してことなきを得ていた。私にはごく自然な光景ではあるが、よく考えればすごいことなのである。沈黙^{ちんもく}の習慣を持たない人から見れば、ほとんど超能力の世界だと思う。「空気を読む」という言葉が、他の国の言語であるのかないのかはわからないが、しかし、それは明らかに特殊^{とくしゅ}な習慣だと私は思う。

(角田光代「お金と沈黙^{ちんもく}」による)



ここで確認しなければならないのは、「わたしがわたしである」ことを「覚えている」ということは、過去の行動の完全な履歴が保存されるのではなく、思い出されるたびに変化し、意味付けの変わる記憶を維持しているということであり、そこには「忘却」も同じくらい必要とされるものであるということだ。すなわちそれは、「記憶」と「記録」が、質としてまったく異なるものであることを意味している。記録が記憶に果たす役割を考えるために、もう少し「記憶のあいまいさ」という点について述べてみよう。

認知心理学者の高橋雅延によれば、私たちが「覚えている」と思っている過去の記憶も、実はかなりの程度あいまいさを残している部分があるという。高橋によると、私たちは一ヶ月前のことを、事実のとおりに思い出せると考えがちだが、実際には、時間をおくことで、五〇%前後の記憶が入れ替わってしまうというのだ。つまりそこで私たちは、「想起する記憶内容の一部を選択し、再構成している」のである。さらに言えば、何度も繰り返し思い出すことで、「虚偽の記憶」が現れる場合さえあると高橋は述べている。

その記憶のゆがみに影響を及ぼすのは、たとえば「暗黙理論」と呼ばれるような素人考えだ。暗黙理論とは、必ずしも明確な科学的根拠がないにもかかわらず、世間では信じられている知識や概念のことであり、具体的には、「幼少時のトラウマが人格形成に強く影響する」といった知識のことを指す。このように近年の記憶研究は、むしろ記憶が、他者や社会的な認知とのかかわりで容易に変化するような、あいまいなものであることに注目しているのである。

こうした知見に基づいて、心理学者は、「わたしはわたしのことを覚えていて」という出来事が、文字どおり過去の出来事を脳内にストックするようなものではなく、思い出されることによって、それが新たに「記憶」として上書きされるような、「自己物語」の側面を持つと主張している。つまり、わたしがわたしであることの確信は、（「もうひとりの自分」のようなものを含む）他者への語りの中から生成してくるということだ。

だとすれば、そこで「記録」というメディアが、自己を形成するのに非常に重要な役割を果たすことは、容易に想像できるだろう。「高校時代の友人」が、どのような人だったのか、放っておけば私たちはすぐに忘れてしまう。しかし、日常にはあまり思い出されることのない相手であっても、卒業アルバムを見返したり、あるいはときにそれを別の友人に見せながら、「彼はこういう人でね」とか「ああ、こんな人もいたなあ、彼女はね……」と語ったりすることで、そのたびに「高校時代の自分」を構成することができるとしてそれを通じて「あのときは意識しなかったけど、ほんとうはこの人のことが好きだったんだ」などといったように、記録をもとにした他者への語りを通じて、「いまの自分」に接続される自己物語を生成するのである。

（鈴木謙介『ウェブ社会の思想』による）



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集1番の長文「なぜ、通常、私たちは」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 人間は、他人が考えたことをあたかも自分が考えたことであるかのように錯覚しやすい
B ランボーやフローベールの小説の中には、たしかにそれを生み出した確実な個人がいる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番の長文「なぜ、通常、私たちは」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 作品は、作者によって生み出されているとは言い切れない
B 作品は、作者が読み手におくる運動と、読み手から反応がおくられる運動とから成り立っている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番の長文「外国語には」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 二者択一でひとつを選択するのは、他方を否定することである
B 一元論の立場からは、「あれもこれも」という考えは矛盾になる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番の長文「外国語には」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A シェークスピアのような天才でも、一元論の限界から逃れることはできなかった
B 日本語は、不調和を越えた調和を支えるのに適している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番の長文「近代小説は一般に」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 近代小説は、様式に制約がないので、無制約な形式であるといわれている
B 言文一致体と軍隊用語の「自分ハ……デアリマス」という言い方の間には共通性がある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番の長文「近代小説は一般に」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 近代小説は制約の少ないジャンルだったので、言文一致体の試行錯誤の場となった
B 近代小説の作者は、近代小説の持つ暗黙の制約性を深く自覚していた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番の長文「『くるまざ』という言葉は」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 車座というものは、異なる世界に住むものも仲間にしてしまう親しさを持っている
B 緊急事態が解決されると車座はくずれ、女たちが花を添えるようになる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番の長文「『くるまざ』という言葉は」を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日米の貿易摩擦は、車座社会と開放社会の文化の対立とも言える
B 貿易摩擦として表れた文化の摩擦は、政府の中だけでなく市民の中にもあるはずだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「社会において」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本では決め事は、対立する利害を相互に譲り合うことで、一挙に妥協点を見出す形で行われる
B 日本流の決め方では、一方が譲ったのに相手が譲らなければ、譲った方が損をすることになる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「社会において」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本人が中国人相手に、相手の譲歩を期待して自分が先に譲歩すると、かえって不利になることがある
B 気持ちのわかりあいというのは、日本社会に固有なコミュニケーションの様式と結びついている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「天文学者が宇宙の彼方を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 我々が、お守りやアクセサリーのようなシンボルを持つのは、物にもともとシンボル機能があるからである
B 視覚系は電磁波をとらえ、聴覚系は音波をとらえ、それが脳の中で等価交換されている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「天文学者が宇宙の彼方を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A お金を媒介にすると、本来は無関係なあらゆるものの交換が可能になる
B 考え方の違いを調整することは、利害関係を調整することより難しい
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「近代文明は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近代は、構造の発想を排除し、機能の発想を社会に広めた
B 機能の発想を重視するなら、ルールは変更してもかまわない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「近代文明は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 機能の文明の中では、強制的に何かをさせようとするとかえって成果が出なくなる
B 機能の文明のあとに来る意味の文明は、形を変えた構造の文明でもある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「英語にキャノンCanonという」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A アメリカでは、西部劇でインディアンを野蛮に描く描き方が、そうでない描き方に变化している
B 文学における古典と呼ばれた作品の価値も、時代とともに变化する
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「英語にキャノンCanonという」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 初期のころ、夏目漱石は森鷗外よりも有名ではなかった
B 最近のアメリカにおけるキャノンの見直しにもかかわらず、アメリカの価値観は変化していない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

- 問1 読解マラソン集9番「日本人は、一般的には」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■日本の伝統的季節行事がニュースの枕詞になっているというのは、話題にはなっているが実質はあまりないという意味である。
1 ○ 2 ×
- 問2 読解マラソン集9番「日本人は、一般的には」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■日本人も心の中では、欧米のような一貫性を持ちたいと思っている。
1 ○ 2 ×
- 問3 読解マラソン集10番「あるところに、一本の木が」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■少年は、ひとりぼっちなので木とよく遊んでいた。
1 ○ 2 ×
- 問4 読解マラソン集10番「あるところに、一本の木が」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■日本の子供たちは、「木は幸せだった」という言葉を額面どおりに受け取らない子が多かった。
1 ○ 2 ×
- 問5 読解マラソン集11番「チップを渡すということが」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■外国の人が日本を旅行するとき、チップのない習慣に苦勞する。
1 ○ 2 ×
- 問6 読解マラソン集11番「チップを渡すということが」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■「空気を読む」ということは、日本人にだけ備わった能力である。
1 ○ 2 ×
- 問7 読解マラソン集12番「ここで確認しなければならないのは」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■私たちは過去を思い出すとき、その過去の記憶を作っているのでもある。
1 ○ 2 ×
- 問8 読解マラソン集12番「ここで確認しなければならないのは」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
■卒業アルバムの記録よりも、心の中の記憶の方がずっと豊かである。
1 ○ 2 ×

1 ~ 3 月

小1 コード：nane パ ス： PDF	小2 コード：nane パ ス： PDF	小3 コード：nane パ ス： PDF
小4 コード：nane パ ス： PDF	小5 コード：nane パ ス： PDF	小6 コード：nane パ ス： PDF
中1 コード：nane パ ス： PDF	中2 コード：nane パ ス： PDF	中3 コード：nane パ ス： PDF
高1 コード：nane パ ス： PDF	高2 コード：nane パ ス： PDF	高3 コード：nane パ ス： PDF